

尾道の歴史と遺跡シリーズ4

尾道近世遺跡
北前船と港町尾道



平成29年3月
尾道市教育委員会



三島神社 ^{みずち} 蛟(愛媛県伊予市)



正八幡神社 狛犬(福岡県行橋市)

港

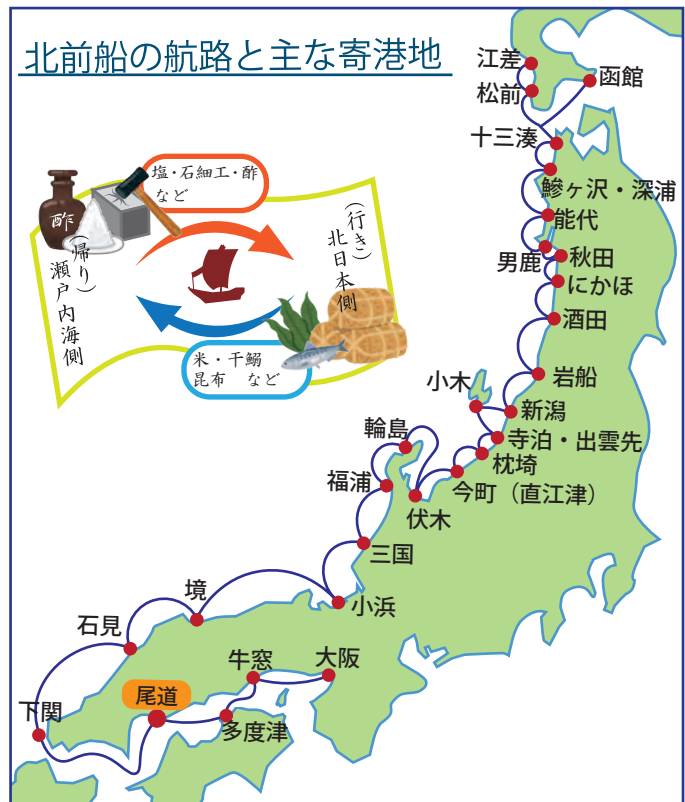
町尾道（尾道近世遺跡）には北前船や遠隔地との交易船などにより、穀物や干鰯、昆布、陶磁器などの生活雑貨、その他の様々な商品が運ばれてきました。尾道近世遺跡からは、江戸時代に作られ使用されていた茶碗や皿等、土師質土器、^{はじしつどき}国産陶器、外国製陶磁器等が大量に出土しています。これらは、港町に住んでいた人々が使用していた生活雑器や商品として販売していたものまで様々な種類の土器があります。

また、北前船により、北海道や日本海側の港町には尾道石工が制作した花崗岩製の石細工（鳥居、灯籠、狛犬など）が分布しています。これは、これらの地域と尾道が交易で密接に結びついていた、商人どうしの交流があったことを示しています。

他にも、四国西側沿岸部や徳島県の吉野川流域、瀬戸内海沿岸、さらに愛知県の^{ちた}知多半島等に尾道石工の石造物が確認されています。北前船だけでなく、様々なルートで遠隔地と交易していたことがうかがえます。これは、港町尾道と、そこで活動する尾道商人の繁栄ぶりを示す資料であるといえます。



天満神社 鳥居(愛媛県四国中央市) 正蔵寺 燈籠(愛知県美浜町)



尾道近世遺跡—北前船と港町尾道

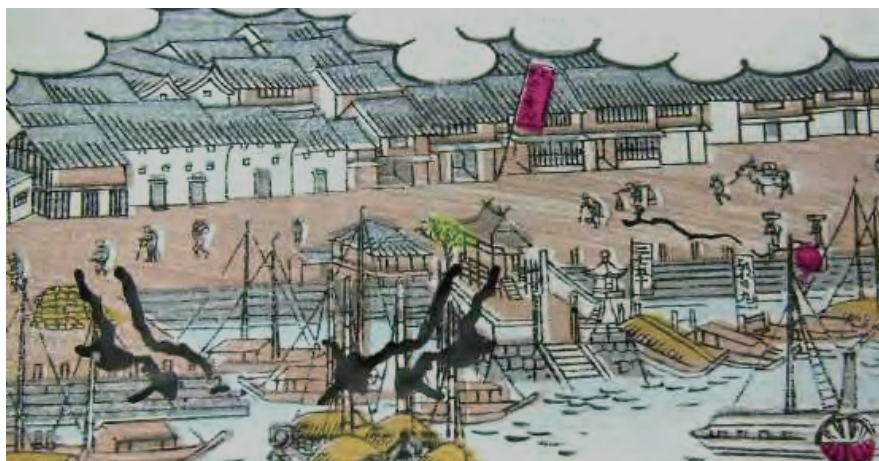
平成 29 年 3 月

地域の特色ある埋蔵文化財活用事業

編集：尾道市企画財務部文化振興課



江戸時代の 港町尾道



住吉浜の様子

尾道が港町としての役割を担うようになったのは、平安時代の嘉応元年（1169）に大田庄の倉敷地に指定されたことがきっかけでした。

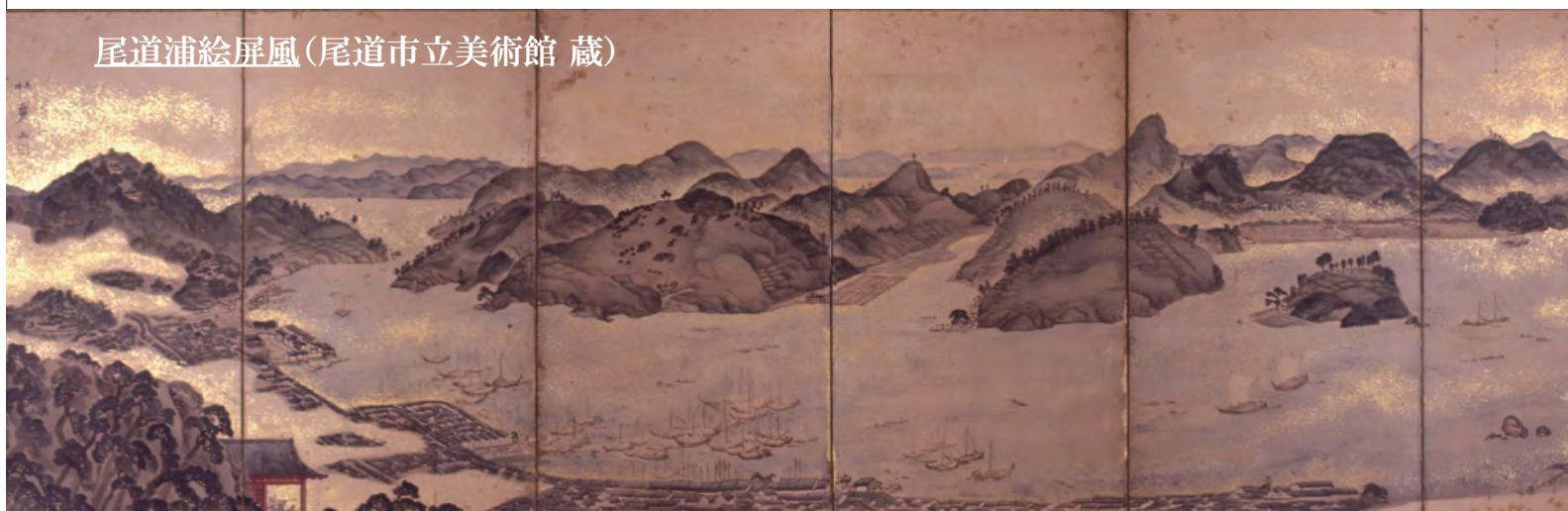
当時は、世羅郡を中心とした大田庄という荘園がありましたが、ここでの年貢を船で積み出す場所がありませんでした。そこで、大田庄に近く、地形が入り組み自然に湾を形成しており、船を泊めやすかったため、年貢積み出し港としての機能を果たすようになったのが尾道です。その後は、年貢だけでなく様々な商品も輸送するようになり、ますます港町尾道は発展することとなりました。

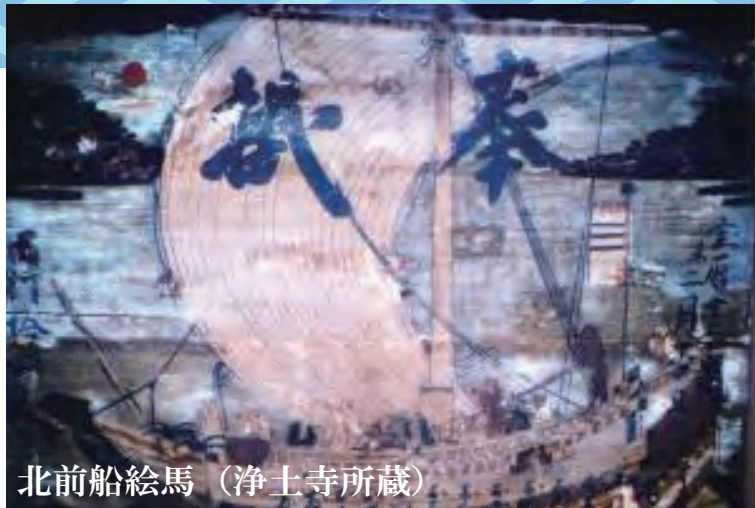
江戸時代になると、尾道に「北前船」が立ち寄ることになります。北前船は、東北や蝦夷（北海道）の米や産品を積み込み、日本海側を進んで下関を廻り、瀬戸内海を通過して大坂へと向かう船のことです。北前船が通る航路のことを「西廻り航路」と言い、多くの船が利用するところとなりました。

この船は、港に寄る度に現地の商人や、同じように船でやってきた商人たちと、積んでいる商品の取り引きをしたり、新たにその土地の品物を積んで商売をしながら航海をしていました。北海道や東北の各地からは、穀物（米など）や干鰯（イワシを干した肥料）、昆布などが運ばれ、尾道からは、塩や畳表、酢などが積み込まれました。また、尾道石工が制作した花崗岩製の石細工（鳥居や狛犬、灯籠など）もあわせて積み込まれ、全国に運ばれています。

古くから、瀬戸内海でも大きな港町だった尾道は、北前船やその他の船がたくさん立ち寄る港町として、さらに発展することになります。そして、港町の発展は、多くの商人が集まる町となり、埋立工事も行われ、町が拡大していきます。このような様子は、発掘調査からも知ることができます。

尾道浦絵屏風(尾道市立美術館 蔵)





北前船絵馬 (浄土寺所蔵)

江戸時代の 尾道の文化



爽籟軒庭園



ゆうすいえん
挾翠園の滝跡

江戸時代には、商工業、金融業などの発展により、数多くの豪商ごうしょう（大商人）が生まれました。港町尾道では、灰屋橋本家、油屋亀山家、住屋島居家、東屋天野家などの豪商が、町の発展に大きく貢献し、商人たちを取りまとめるとともに、尾道独特の「茶園文化」さいえんぶんかが生まれました。

港町尾道の商人たちは、江戸時代から明治・大正時代にかけて、港町の中心部や、見晴らしのよい斜面地に庭園付きの邸宅や別荘を築きました。そこには、頼山陽や菅茶山、田能村竹田、平田玉蘊などの文人が訪れ、商人たちと交流することにより、尾道の文化は大きく発展しました。

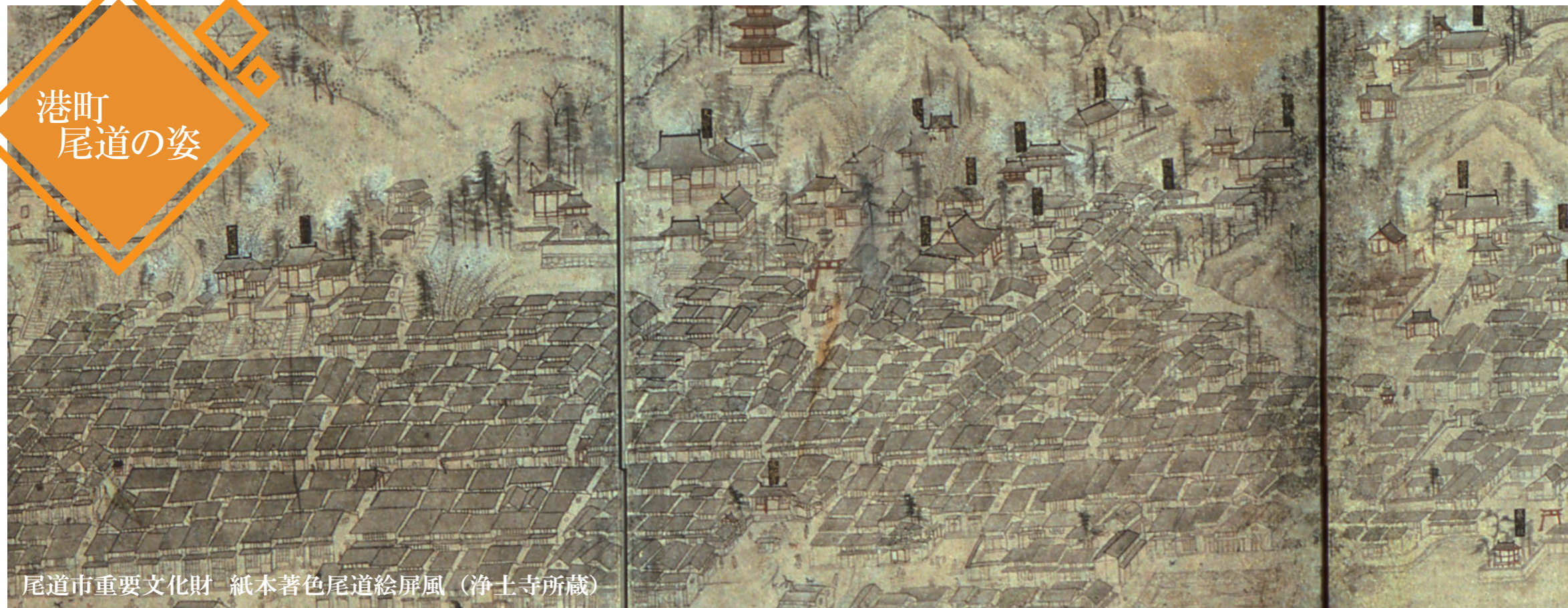


挾翠園跡出土土器 (茶器)



挾翠園跡出土土器 (茶器)

港町 尾道の姿



尾道市重要文化財 紙本著色尾道絵屏風（浄土寺所蔵）



尾道近世遺跡、発掘調査の様子

市内江戸時代の町並みの様子が分かるような場所はいくつかありますが、遺跡の調査を行っているのは、尾道近世遺跡のみです。ここでは、尾道近世遺跡の調査成果と町並みを描いている江戸時代の絵図を比較しながら、当時の様子を明らかにします。

江戸時代の尾道を描いている絵図として、安永3年（1774）の紙本著色尾道絵屏風（尾道市重要文化財 浄土寺所蔵）があります。これは向島側からみた尾道の様子を鮮明かつ詳細に描いており、西国街道（本通り）の両脇に商家や民家が密集して建ち並び、海岸を埋め立てている様子などがよく分かります。

絵図には、多くの寺社が山裾に並び、町の西側には大きく尾道町奉行所と蔵所が描かれています。また、細かい小路も描かれており、当時と現在の町の様子はほとんど変化していません。

こうした町の様子は、発掘調査の成果でも解明されつつあります。発掘調査では、現在の地面から少しずつ掘り下げていきます。そうすると、現代の建物、近代の建物跡がみられ、その下に江戸時代の地層が現れます。江戸時代の地層は地表面から約1m～2mの間の深さにあり、場所によって違いがみられます。

地層からは、建物の痕跡である柱穴や礎石、貯蔵穴、石組遺構、溝跡などが多数発見されます。それらを絵図の場所と比較することで、建物が建っていた根拠となります。このように発掘調査だけでなく、絵図などの資料と比較することで、町並みの復元の有力な情報を得ることができます。では、当時の建物はどのようなものだったのでしょうか。発掘調査と絵図を比較しながら考えてみたいと思います。

発掘調査では、礎石建物が発見されています。柱は無くなっていますが、礎石はそのままの状態が残っているため、建物の大きさや構造が分かります。他に漆喰で壁を塗り固めた穴や木の板をはめ込んでいる穴が多数見つかっています。これらは、貯蔵用であったり、水瓶として使用されていたと考えられます。

こうした建物遺構から推測できる建物は、柱を礎石の上にたて、中には貯蔵穴や石組がある木造建物であり、尾道の商人の店や家であると考えられます。また、一般的な商家の他に、庭園付きの邸宅跡も見つかっています。写真は庭園にあった水琴窟です。丹波焼の甕（かめ）の底に穴を開け、逆さにしています。ここに水を落とすことで音が鳴るしかけになっています。こうした風流なしかけがある庭園があったことが分かります。

これらの絵図には、建物だけでなく、道も描かれています。現在の本通り商店街は、江戸時代には西国街道として人々の往来があり、この道を中心にして町が形成されたとも言えます。この西国街道を発掘調査した際には、何層にもわたって平らに整地された地層が見つかりました。この層は室町時代の頃から連続して続いており、江戸時代以前に作られた道を西国街道として利用していることが分かりました。この西国街道沿いには、尾道町奉行所や本陣（笠岡屋）、脇本陣、橋本家などの豪商の商家が軒を連ね、宿場町としての機能を果たしていました。街道からは、細い小路がいくつも派生し、あるいは、斜面地の寺社へ続く参道が伸びていました。こうした町並みは、港町だけでなく、宿場町として発展した尾道の姿であるといえます。

港町尾道から
発掘されたもの



丹波焼甕

港町尾道（尾道近世遺跡）からは、たくさんの土器や木製品、石製品などが出土しています。これらは、港町に住んでいた人々が使用していた生活雑器や商品として販売していたものまで様々な種類の土器があります。

土師質土器は、素焼きの土器で、「かわらけ」とも呼ばれます。比較的柔らかく、もろい反面、大量生産が可能な土器です。江戸時代以前には皿、碗、鍋などの種類がありましたが、江戸時代になると硬質で使いやすい陶磁器が主流となり、土師質土器では、灯りをともす灯明皿や鍋などがみられるのみとなりました。

日本各地からもたくさんの陶磁器が尾道に運ばれてきました。瀬戸焼（愛知県）や備前焼（岡山県）、丹波焼（兵庫県）、唐津焼（佐賀県・長崎県）など日本各地の窯で焼かれた陶器が出土しています。特に備前焼播鉢、茶入、丹波焼甕、唐津焼碗、皿は日常使用される頻度も高いようで、多く出土しています。

このように江戸時代には、国産の陶磁器が主流となり、海外からの輸入陶磁器は減少します。それは、各地の大名が陶磁器生産に力を入れ、名産品にしようと奨励していたことが大きく、それが、流通拠点である尾道にも影響しています。

さらに、こうした陶磁器の他にも、様々な鉄製品、椀や皿、杓文字、櫛、膳、下駄といった木製品、砥石などの石製品も数多く出土しており、そうした製品も流通していました。

北前船やたくさんの交易船が出入りした港町尾道は、日本全国から、人と物が集まる町でもあり、商人たちが活躍した町でもありました。



備前焼播鉢



唐津焼碗



玉乗り狛犬
(尾道市 八坂神社)



玉乗り狛犬
(新潟県糸魚川市)



江戸時代の港町尾道からは、様々な名産品が全国に運ばれました。その名産品をあげてみると、
いしざいく てついかり あみがさ さしほ 石細工、鉄碇、編笠、刺帆、酢・醤油、柿渋、酒、塩、畳表などがあります。特に石細工と鉄碇、
酢などは、北海道や東北の日本海側などの遠隔地にも運ばれ、現在でも狛犬や鳥居、酢瓶などが
残されています。

尾道は「石のまち」とも呼ばれます。市内の多くの山には、花崗岩の巨石が今も残り、古くから良
質の花崗岩が切り出されていました。古代には、古墳などに、中世になると、寺社の建造物の礎石
や五輪塔などに花崗岩が使用され、石細工の基礎ができてきたといえます。

江戸時代に入ると、五輪塔などの他に鳥居や狛犬、常夜燈、注連柱など多様な種類の石造物が
作られるようになり、また、それらを製作する石工と呼ばれる職人が多くみられるようになります。

神社にある狛犬の中には、丸い玉に前足を乗せた「玉乗り狛犬」があります。



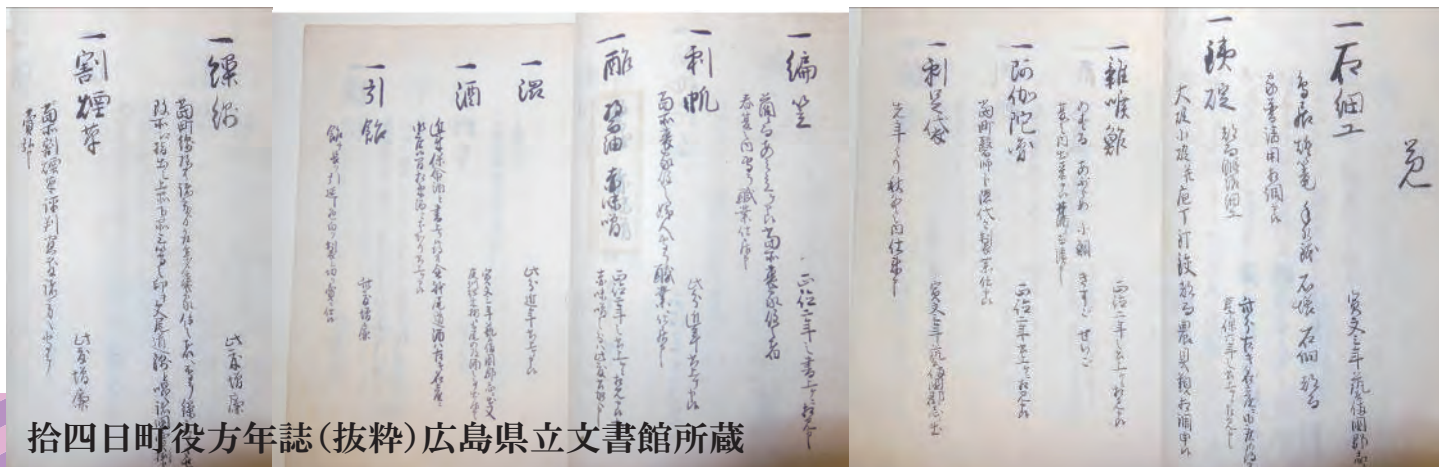
白山神社 鳥居 (新潟県佐渡市)



日吉神社 燈籠 (石川県金沢市)



酢瓶 (尾道市)



拾四日町役方年誌(抜粹) 広島県立文書館所蔵